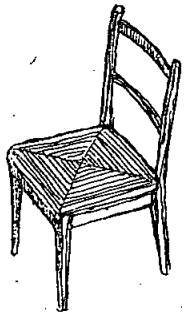
度も同じ事を聞いたり、相手と同じ様な言葉を使つたり、おだてたり、きたない出来物を嫌だなあと思いながらも見てやつたり……している中に、すてばち的態度をとり、虚勢を張つていた相手も、しだいに態度が柔らぎ、最後には、自分の今までの態度を詫びる様になつた。ここまで来た時には、ほつとしたのか全く疲れてしまい、私自身がつかりした。

が、一応は概要を摑み、やや童心にもどりはじめたものの、再び同じ道に進んでしまうのではないかと、少々心配でもある。

N児童相談所に送選されたが、本人が最後に望んでいた〃父親の許しを得たい〃と云う事を、家庭の受け入れ態勢と共に、本人の今後の指導をしてあげなければ、現社会に於ける数多い現象だけに、困難な問題だと思う。



ケース記録

―現場実習より―

四年　竹内敦子

第一回面接

児童名　O・K　昭16・3・1生　13才
本籍　C県××郡
現住所　K市××町
学歴　××中学二年在
保護者　O・W　続柄実父
通告者　Y警察署
主訴　昭二九・三・一二日午後九時××区××町に於て婦人の提鞄から現金一三〇円窃取。

昭二九・七・二七日午後七時頃同所にて婦人の所持せるハンドバックより現金九八〇円在中の財布をすり取つたものである。

右の簡単なケースレコードに目を通し、本人に逢つた。サルの様な感じでシワの多い顔つき、精気のないとの少年は、ねずみ色の中学制服を着ていたが、上衣の袖口や胸が垢でひどく汚れている。私が驚いたのは「これが中学二年だろうか」と思う位全体が小柄で一見、小学校五年生位である。

〃と向きあつて座らせると椅子から足をぶらぶらさせながらおとなしい表情である。ケースレコードを手に私は、本籍、名前を聞き出した。こちらの質問に対してすらすらと答え、しかもそれが要領を得て簡潔なのに驚いた。この相談所へ来る迄に何度もくり返しこれらの質問に答えて来たにちがいないと思つた位である。

家出少年に記入させる調査書を出して渡すと、手にとつて少し眺めていたが、たどたどしい文字で一字一字に力を入れて書き出した。途中で一度初めから眺めなおし、

余りに字が不揃いなので恥しそうに私の顔をみてニヤリとしたから、私も笑つた。笑うと人なつつこい可愛い顔になる。彼が記入したのは大略次の通りである。

「両親は…健在」

「兄弟は…姉一人、兄二人」

「生活保護は…うけていない」

「いつ家を出て来たか…七月一七日」

「誰かに断つて出て来たか…はい」

「お金はいくらもつて来たか…一〇〇円」

「誰のお金か…自分のお金」

と言う様な事であつた。

家出児童に対する調査書はこれで一応終つた。面接を始めてすでに三〇分位経過したので一寸中休みをした。私が何か聞くとなかなか愛想よく返答してくれる。しかし話がとぎれると自分から何か聞くのでもなく、もじもじするでなく、おとなしく私の言葉を待つている。

私は彼がさつき記入した紙を開いて「おとといの何時頃家を出て来たの」と言うと、待つてましたという様に、朝八時頃、おばさんから掃除のことで小言を言われたのでお盆でもらつた小遣い一〇〇円を持つて東京へ来た」と、さも不満げな口ぶりで一気に答えた。「おばさん?」と聞き返すと、「今お母さんは家に居ないで、おばさんが家のいろんな事をしているのです」「ああそう。それじゃ今、家に居るのは…」と聞いた家族構成は次の通りである。

続柄	名前	年齢	学歴	職業
実父	O・W	56		元警察官 現在警備員
継母(内縁)	M・H	46		
継姉	M・K	15		学生
別居(本籍地在住)				
祖母	O・M	65		
実母	O・C	47		住込み女中
実姉	O・S	26	女専卒	中学校教員
実兄	O・I	20	高校卒	工員
〃	O・J	17	学生	
叔母	O・Y	30	(精神薄弱者らしい)	

実母とは彼の小学校三年の時から別居し、すぐ後におばさんが来た。兄姉は母と行動を共にしたが、本人だけ父のところに残つた。「お父さん好き?」と聞くと、「ええ、(とにつこり笑い)僕をお父さんはとつても可愛がつてくれます。でもおばさんは僕をいじめて殴つたりし、娘といろいろ差別をつけるんです。娘も僕と一緒の中学だもんで、学校で皆に僕の悪口を言いふらしたり、先生に告げ口したりします」「そう、おばさんはどんな事で差別をつけるの?」「いろんなことで。そしてたびたび家のお金がなくなると、僕が盗んだと近所にも言いふらす。でも僕は絶対にしません。娘も僕が盗んだと言うけど、M・Kが家のお金をとる事を僕は知つている。M・Kは自分のお小遣いで買えない、いいものを沢山持つているからM・Kが怪しいんだ」と言葉に力を入れてしやべつた。彼の話によると、お金が紛失するとおばさんは彼のしわざと決めこみ、父親も初めのうちはそんな事は信じなかつたが、おばさんの言をだんだん信じる様になり、今では「ウソをつくな」と殴る。

父親は五年程前精神病になり、狂暴性を発揮するので、父の郷里、山梨で入院治療した。

今は恢癒したが、この後警察官を退職し、恩給と競輪警備員の手当で生活しているが、生活は困窮していない。

「ね、君、一〇〇円持つて家を出て来たのね」と云うと答えるかわりに頷く。おばさんの事を話す時には声に力が入るが、自分のことになると元気がない。しかし私の質問に嫌な顔はしないですらすら答えてくれ

る。それによると、七月一七日お盆の小遣いとしてもらつた一〇〇円を持つて無断で家をとび出し、（さつきの記入とくいちがつている）東京迄の交通費四〇円、映画五〇円、パン一〇円でお金を使い果し、空腹のため窃盗をしたと言う。私は、「でも、一〇〇円しか持つていなくて五〇円の映画をみてしまうと、帰りはどうやつて帰るつもりだつたの？」「おばさんの居る所へなんか帰るつもりはない」とおばさんのことを言う時は又威勢がよくなる。「お父さんは立派なおまわりさんだつたのでしよう。お父さんに恥しくない？」と言うと、平気な笑つた様な表情で、「お腹は空いたし、家へ帰れないし」と云う。家へ帰りたくないと言いながら窃盗の言いわけは家へ帰るためのお金が欲しかつたと答える。その場かぎりの都合のいい返答をしている様子であるが、別に取り立てて咎める様な事はしなかつた。

「君のこれからの事についてどうしたら一番いいかしら」と相談すると、今家へ戻ると父やおばさんが悪い事をしたと殴るにきまつているから帰りたくない。本当は実母のところへ行きたいが、祖母が金銭的にとまかく、本人のことを〝どくつぶし〟と、何かにつけて辛く当るから行けない。山梨に伯父が居て本人を可愛がつてくれると言うが、こんな過ちのあとであるから実父と相談するのが一番いいと、少し私は考えていた。すると「やつぱり家へ帰ります。明日から試験が始まるから」と云う。試験だけは受けないと困るだろうと思い、「君の家の事情を担任の先生はよく知つているの」と聞くと、「担任のI先生が僕をとても可愛がつてくれて何でも相談に来る様にと言つてくれている」と言つた。

もうとの位で打ち切らねば、と時間を気にしつつ「疲れた？」ときくと笑つて首を横にふつた。

I先生（本人の担任女教師三〇才位）へ電話連絡

本人が明日から試験がはじまると言つたのでそのことを確かめるためと、先生の知つている家庭環境をききたいと思い、電話をかける。それによると、

当中学では試験はすでに終り、明日から夏休みに入る。

彼はウソがうまく、友人からしばしばお金を借りて返さない。

複雑な家庭の事情はうすうす知つているが、昨年十一月、都内某中学へ転校したが、書類が戻つて来たため現在彼の学籍はどちらにもない。ずつと欠席している。

彼の家庭では子供の教育について関心がない。

と言う返事、先生が特に彼を可愛がることは笑つて否定し、彼の方から全然なつついて来ないと答えられた。彼の口述に余りウソが多いので私は驚いたが、厚く先生にお礼を言つて電話を切つた。

第二回面接

第一回面接から約一時間半程後、再びO・K君を面接室に通した。私が静かに、「今、I先生に電話をかけた」と云つて表情をうかがうと、ふうんと云つた平気な顔つきに少し拍子ぬけの感じがした。試験はとつくにすみ、明日は終業式だと言つても、全然表情を変えない。「君、きちんと学校へ行つているの？」「一週に二、三度だけど行つています。試験の事はS君から十六日に聞いたんだけど」と一人言の様に言つた。ウソが多い。I先生が、彼のウソには参ると言つていらしたのを思い出し、彼の顔をじ

つと見ていた。「明日から試験がないとが判つたから、お父さんにハガキを出して一度来てもらおうね」とやさしく言うと、「手紙はおばさんが先に読んで破つてしまうから、お父さんは読まない」と云う。こちらで黙つていると「競輪場でお父さんに逢つて、言えば、お母さんと一緒に来てくれるかも知れない」と体をゆすりながら気乗りのしない表情でつぶやく。家庭訪問をすることに心を決め、家迄の地図をかいてもらつた。くわしく説明してくれた後、「おばさんは、人にはとてもうまい事を言い、その人が帰ると僕を殴るんだから」とつぶやき、私におばさんの言をそのまま信じない様に注意した。

都内某中学へ電話問合せ

学籍の件につき、都内某中学へ電話で問合せると、I先生の言葉通り、一度書類が送られて来たが、本人が一週間位出校ののち長欠のため親の承諾を得て書類を元の学校へ送り戻したとのことで、本人の学籍は宙に浮いた形である事が判つた。

家庭訪問　七月二〇日午前一〇時半頃

O・K君に教えられた地図を頼りに、赤い屋根の家を探しあてると、三世帯同居らしく、三枚表札がかかつていた。声をかけるまでもなく、おばさんが出て来たので来意を告げると、大そう愛想よく縁側に座布団を敷いてすすめて下さる。父親は体を悪くして勤務先を休んでいると云うので「お父さんと話したい」と言つたが、寝ている様だし、おばさんが熱心にひざをすすめるので先に父親と話すことはあきらめた。

おばさんの熱心な話しぶりと、K君がおばさんの話になると言葉に力がこもるその様子と共通性がある様にふと感じた。

おばさん（継母）の話

十七日朝家を出たと言うO・Kの言葉は全くのウソで、六日十九日某児童保護相談所にて保護された時小使いさんの金七〇〇円を盗んで逃走、そのまま行方が分らず、私が現在ある児童相談所に保護していると言うとほつとした顔つきであつた。

O・Kは八才頃より他人の物に手を出し、長ずるにつれて人から騙し取つたりし、金額も大きくなり、その弁償で、「この通りハダカになりました」と言つた。本人の挙動にはカゲヒナタがあり、落ち着きがなく、人の心の動きに敏感でウソが多く、且つうまい。父親は金銭的にしまり屋だが子供に甘く、おばさんの目のとどかぬ処で小遣いを与える。O・Kはこの父親からうまくお金をもらうコツを心得ている。O・Kの実母は父親が精神病になつた時父親を見捨てたが、このO・Kだけ嫌がらせのため引き取らない。実母をひどくけなし、子供の教育に無智なため子供がこんなになつた、と責任を母親にありとしている。

実父の話

おばさんはこの土地の児童相談所へ報告に行くのに、父親を連れていくと言い、起して来た。父親は肝臓と心臓が悪いとかで冴えない顔色をしていたが私に厚く礼をのべ、三人で家を出た。駅迄の道を父親にいろいろ話しかけたが、ちらとおばさんの表情をうかがい返事をしぶる。相当気兼ねをしている様子である。かつて精神病院に入院した事があるということは、話し方がのろく、言葉がはつきりしない点や眼が落ち着いていない処でそれとなくうなずける。「O・Kは四人の子供の末つ子で、私にとつて一番可愛いが、家をたびたびとび出し、その度に児童相談所や警察から連絡をうけて申訳ない」と述べ、姉は女専を出て中学

校の先生をしていると自慢気であつた。

×市の児童相談所に着いてから、特に父親と面接したいとそこの先生にお願いし、一室を借りて父親と二人で話す事が出来た。二人きりになるとこちらの問にもいろいろ答えてくれた。

O・Kのことについて家庭の不和に原因があることは父も認めており、経済的には子供に不自由をさせていないが、愛情の点で問題があることも知つていると言つた。実母は若い時から身持ちが悪く、朝鮮人との関係が近所の噂に上る様になり、O・Kはその男に敵意をもつていたそうである。父親が精神病院へ入院した時実母は父を見捨てたので、今の内縁の妻＝おばさんと一緒になつた。このおばさんは、父親の前では何もしないが、陰でO・Kを殴つたりし、娘も意地悪をすることをよく承知している。そしてこのおばさんについては、「口の軽い女で近所へO・Kや実母の悪口を言いふらして歩く」と苦々し気に評した。

結局父親として、O・Kのこれからの事については監督する人もいないし、（父親の手におえないと言つている）実母や子供と一緒に生活する意志もないから、適当な施設に入れることを希望している。

考察　O・Kの環境について

（実父の性格と生活）

養子であるため、妻、祖父母に気兼ねをしていたが精神病になつた時、妻から見捨てられ、内縁の妻に厄介になつた。この一件が余程口惜しかつたとみえ、もし今、子供や母親が復縁を望んでも絶対元のサヤにはおさまらぬと言つている。

精神病の原因については性病らしいと、児童福祉司は説明してくれた。金銭的にしまり屋で、細かいが、子供に、特にO・Kには盲目的な愛情を持つており、欲しいものは人の目をはばかつてまでして買い与える。O・Kを愛してはいるが指導する力はない。

（実母の性格と生活）

夫が金銭的にしまり屋であるため、夫の財布からしばしばお金を抜き取つていたが、これがO・Kに盗みを覚えさせる始まりとなり、母親を真似て父の財布からお金を盗んでも母親は黙認し、かえつて「父のお金は子のお金」と許していた。素行上悪評が何度も立ち、現在は料理屋で住込み女中をしているらしいが行方は不明である。以前にO・Kが母親のつとめ先へ行き、そこの主人の金を盗んだため、母親はとりて住所を秘めているらしい。

（継母の性格と生活）

どこへ来る迄、どんな生活をしていたか不明であるが、教養のある女とは思えない。先妻＝実母をひどく怨み、O・Kも憎んでいる。夫＝父親については病気の時、世話をしたと云う事でひどく恩に着せているが、そのためか父親は全くこの女の支配をうけている様子である。

（本人の性格と生活）

姉は女専を出て中学の教師をし、二人の兄は高校に学んでいるのに一番末つ子の本人だけこの様な問題を起しているのは何故だろうか。

原因はいろいろあるだろう。母親が他の男と噂が立つた時、O・Kだけ未だ幼かつた。末つ子は特に母親に対し独占欲が強いものであるが、彼も子供心に激しい嫌悪感を持つたと云う。

やがて父は精神病になり、母から見捨てられたため、おばさんと一緒になつた。姉、兄と別れて一人父親のところに残つた事についておばさんは、「母親がいやがらせの

ため引き取らない」と云い、本人を嫌悪し、娘と二人でいじめる。O・Kは父がおばさんの手前本人を可愛がることをはばかる事を知つている。はじめは母親の見真似で始めた盗みも、後には反抗となつて表われている様に思える。父親からおばさんの目を避けてお金をねだることも覚え、大人の気持にさとくなつた。O・Kには放浪癖があり、一つのことに集注できぬ。

私との面接でウソが多いが、とちらがウソを見破つてもケロリとして、尚、「そんな事はないがナア」とつぶやく様に軽く否定する。ウソと同時に言葉には誇張が多い。〃可愛がつてくれる〃とどの人についても言うが、相手の人から特に愛情を抱かれているどころか、そつぽをむかれているのである。彼を保護する義務のある近親者迄が、現在の彼について責任をなすり合つている様に思われる。あと二、三年で思春期に入るが、母親の素行上の事もあり、彼に新しい問題が起らねば、と心配するのも決して取越し苦労でないと思う。

彼は私に沢山ウソを言つた。しかし父、母、姉、兄、揃つて一つ家に住みたいと言つた言葉だけは、あの少年の本心からの声かも知れないと言う気がする。

以上

一九五四年度卒業論文題目

社会保障の真空にある階層	森野光美
低所得階層	松井節子
被保護階層の動向とボーダーライン層	大森彌生
我が国労働組合の経営参加について	林衣代
社会問題としての賃金労働者及びその問題について	倉田英子
炭鉱主婦の動きの一考察	磯生田幸子
日本に於ける年少労働者の問題	久世洋子
母子福祉活動に関する拠点	大槻彌栄子
主婦の平和に対する考え方（川崎古市場に於ける）	武田富乃
夫婦間の緊張	愛甲久子
母子家族における諸問題の研究	網本玲子
旧きS・Wへの一石（上流社会に対するパーソナリティ形成の問題）	山根節子
	新谷弘子
	若松信子
	滝口智恵子
	田中養子
	芝本朗子
	中村久枝
	土井喜久子
	後藤陽子
	小松輝子
	岩崎澄子
	中村典子